

明治39年 岐阜地区入植の経緯と当時の暮らし

『郷土文化』54号』掲載

私の先祖は、岐阜県揖斐郡富秋村寺内から明治39年3月、当地常呂村字岐阜西7線30番地に入植しました。北海道に移住することを決意した理由は、以下の通りです。私の父の鶴松は明治7年に出生、家業を継いで昔の百姓になったのだそうです。そして明治32年に結婚。当時の百姓は3反百姓で生活が苦しく、田を耕作するかたわら農外の仕事に朝早くから夜遅くまで働かなければ生活はできず、貧しい暮らしが続いたそうです。

そんな時、先に北海道に渡った人が帰ってきて、北海道は土地は広いし、払い下げの願書さえ出せば何町歩でも土地がもらえるという話をしたので、それでは男の子が3人もいるし、北海道へ行けば食物くらいは十分できるだろうと思いい、渡道することを決めたそうです。決して一旗揚げるなどという大きな望みはなかったそうです。

ちやうどその頃は日露戦争が終わって、兵隊が勝った勝ったと凱旋してくるのを迎えるにぎやかな時でした。

私たちの親は、岐阜駅から発ちましたが、北海道へ行くのかと親族の方々とは涙で別れて来たそうです。その当時の北海道は、今の私たちには想像もつかないところだったと思います。

函館から汽車で名寄まで来て、それから子どもは歩かせ、荷物は背負い、輿部を通過してオホーツク海の海岸に出て歩いたのだそうです。途中、先に入地していた親族の方々が無事で迎えに来てくれました。雪の北海道に初めて来て、こんな嬉しかったことはなかったと話してくれました。北海道の雪深い常呂での生活は、ここから始まりました。

ところが話に聞いていたのとは全然違い、先に入植した方々が良い条件の土地はみな権利を持っており、1反歩の土地も無償ではもらえませんでした。お金がなかったため、早く来た人の薪切りや馬草刈りなどをして得たお金で土地代を払ったそうです。開墾の合間にやらなければならなかったのも、雨降りも天気の日も起きる時間はまだ暗い時間で、闇の毎日だったとのことでした。そんな具合だったので生活は大変でした。食べものは少しずつ開墾した畑で作った芋、カボチャ、そば、イナキビ、麦飯は上等の食で、米の飯は風邪薬だったと聞きました。

住宅はといえば掘って立て小屋で、木を切り倒し、木を選んで必要な長さに切り、それの間取りになるように穴を掘って木を立て、横木を打ち付け、それに草を刈って結びつけ囲いにするものでした。家といっても、今の人には住む家とは思ってくれないでしょう。冬の夜は布団の上に雪がたまるのが珍しいことではありません。これは私も記憶にあります。自家生産できない食糧は、常呂から背負ってきたと聞きました。

道路も名ばかりで、雨降りには木を倒し、橋の代わりにして歩かないと通れないところがあったそうです。特に元の佐藤商店からの6号道路は道がなく、未開地なので当然ですが、立木に目印を付けて通ったそうです。その未開の地に我が先祖は入地して開拓し、今日の西部組合地区の基礎を作ったわけですから、先祖に対して改めて感謝の誠を捧げます。3戸、5戸と、この地に相前後して9戸の方々が入地し、西の高台と言われたそうです。

それから10年目に私は四男として生まれました。これまでのことはみな母から聞いたことばかりです。(略)